



報告1 杉沢遺跡と島根県内の道路遺構

江 角 健（出雲市文化財課）

出雲市文化財課の江角健と申します。私が、杉沢遺跡の調査担当といたしまして、発掘調査を行いました。今日は、その発掘調査成果について、ご説明をしたいと思います。

まず、杉沢遺跡の位置ですが、今日の会場（アクティーひかわ）から南東へ約500mのところがあり、現在進められている、出雲斐川中央工業団地の造成工事現場の南西の角にあります（図1）。調査によって、その一角からこの道路遺構が見つかっています。近くには、大量の弥生銅剣が発見された荒神谷遺跡、四隅突出型墳丘墓がある西谷墳墓群などの遺跡があります。また、南側の仏経山は、『出雲国風土記』にもある「神名火山」に比定され、このふもとに多数の遺跡が存在しています。その一つが杉沢遺跡です。

図2は北側から見た写真です。現在、造成が進



図1 杉沢遺跡の位置

んでおり、ほぼ平らに近い状態になっています。中央の星印の位置から道路遺構が見つかってます。

それでは、本題の「杉沢遺跡の古代道路遺構」について、具体的な説明を行ってまいります。

図3は、西側上空から撮った写真です。幅が約15m、東西が60mの調査区で発掘を行っています。



図2 杉沢遺跡全景（北から） ☆の位置で道路遺構検出



図3 杉沢遺跡の道路遺構（西から）

す。一番下の方に縦に筋が延びているのが側溝、中央から、波板状凹凸面が出ています。

では、この道がいつから使われていたかということですが、史料に残っている中では、文政6年(1823)、今から約200年前の『漆沼郷下直江村絵図』に記録があります(図4)。中央に一本、東西に延びる直線がありますが、ここに「筑紫海道」と書かれています。ここでは街道が「海道」と書かれています。また、下側には、「杣澤^{すぎさわ}」という地名が残っております。これが今の杉沢遺跡の基になっています。この筑紫街道の位置と今回調査した位置が合致し、また、明治時代の地籍図(土地の境が載った地図)にもここに約2m幅の道が記されていまして、道があるということがわかっていましたが、今回の調査によって、次に説明する道路遺構が発見されました(図5)。

この場所は、東西に延びる尾根上を発掘調査しました。試掘調査を行ったトレンチが5～6本見えます。試掘調査の段階で、硬い層が部分的に確認できていたのですが、まだ、このような広い道路があるということは確認できていませんでした。

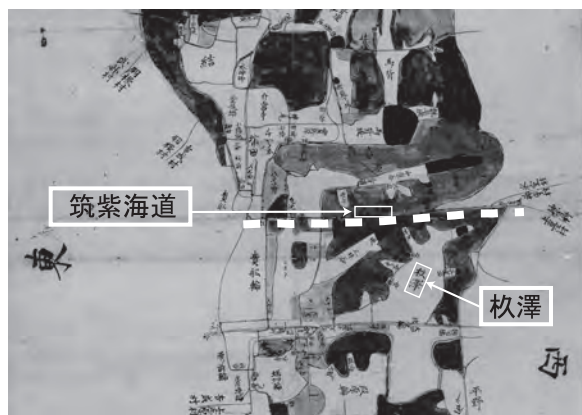


図4『漆沼郷下直江村絵図』(部分)(所蔵:原勉氏)

今となつては、非常に広く平らな面が、まさしく道路のように見えますが、当時としては、そこまでの認識はなく、掘り下げていきました。図5の下が調査後の写真です。道路方向に直交する幅0.2～0.3m、深さ0.2m、長辺3～5mの溝が0.7～0.8m間隔で出てきました。これが波板状凹凸面と言われるものです。詳細は後に説明しますが、この調査区において、道路面の約3分の1でこういった波板状凹凸面が出ています。

北側で検出した側溝は、幅0.5m、深さ0.1m



図5 道路遺構調査前（上）調査後（下）（西から）

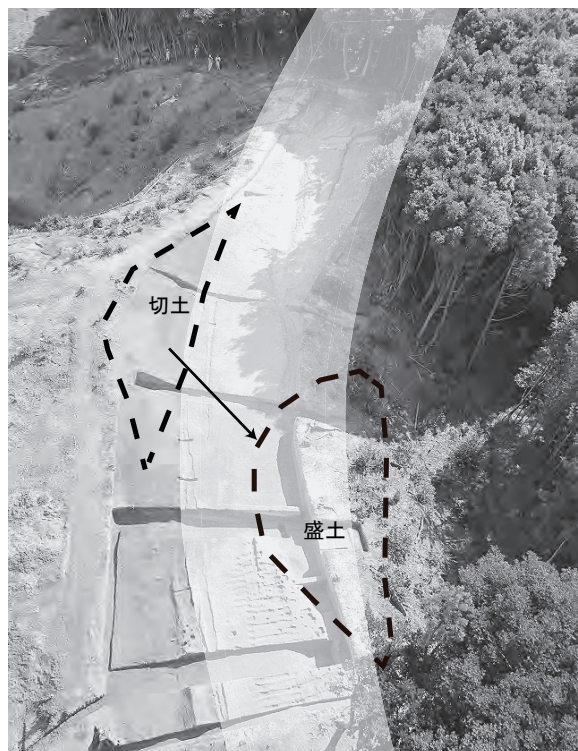


図6 平坦面造成の様子

の浅いものでした。反対側の側溝を探すために、調査したところ、南側の側溝を確認し、南北側溝の心々間が9 mとなりました。これが古代道路遺構ということで、今回に至っています。

続いて、道路の特徴について説明します。まず、特徴①は尾根上に平坦面が造成されたということです。山の尾根は、起伏があり、くねくねとしています。ここでは、幅の広い道を造成するために、山の高い部分を切り、そこで生じた土（^{きりど}切土）を谷の部分へ盛って（^{もりど}盛土）、高低差をなくしながら広い幅の面を造っています（図6）。盛土をして谷を埋めることによって、カーブの少ない直線に近い道を造り出そうという工事の様子がうかがえました。図7がこの盛土の所の断面ですが、一番下が赤土の地山、その上に木の葉っぱなどが積もり腐葉土となった黒色の旧地表土がありました。非常に水分が多く柔らかい泥でした。そのさらに上に、地山と同じ土を谷方向へ厚く盛り水平な面を造り出した盛土があり、その上部に、非常に硬い砂質土の面がありました。これを道路の路面と考えています。

続いて、特徴②です。先ほどから、聞き慣れな

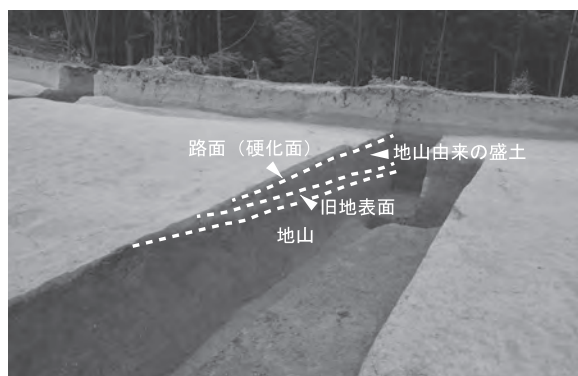


図7 造成の痕跡が残る土層断面（西から）

い言葉かと思いますが、地盤改良の痕跡で、波板状凹凸面と呼ばれる、全国の道路の軟弱な地盤の所に多く出ている遺構を検出しました。波板状凹凸面とは、屋根等に使われているトタン波板のように地面が凸凹しているということで、このような呼び名がついています。その波板状凹凸面の断面を確認するために、四角い溝を掘りましたが、通常、遺跡の発掘では、硬い地山の中に柔らかい土が入っていますので、その柔らかい土を掘ると昔掘った穴というのが見えるのですが、ここは逆で、水分を多く含んだやわらかい黒色土を掘り込んで、そこへ非常に目の細かい砂質土を充填し、



図8 目の細かい砂で埋められた波板状凹凸面の断面（北から）

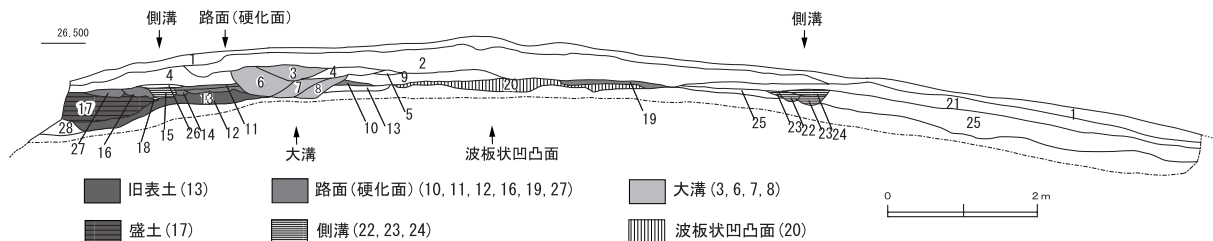


図9 道路遺構断面図

締め固めたように埋まっていた（図8）。諸説ありますが、ここでは、地盤を固めるために造ったのではないかと考えています。

続いて特徴③として、幅9mの道路面と両側側溝が見つかりました。南北から細長い溝、南側については、トレンチで2か所掘ったところから、溝が出ました。2か所の溝が繋がりましたので、南側の側溝ということで判断していますが、南北の溝の中心からの幅が約9mあります。この9mという幅は、多くの官道にある特徴の一つになっています。9m幅といいますと、今の道路ですと、片側1車線の道路と歩道をあわせたくらいの広さになります。非常に広い道路です。町の中にある道路は4mくらいですので、その2倍の幅がある道が当時造られたのがわかっています。図9が遺構西側の断面図です。17が盛土、下の13が旧表土ということで、やはりここでも幅をとるために、谷を埋めて平坦面を広く拡張して、そこへ側溝(15)を掘って道路の幅をとっているという工事の様子がうかがえます。旧表土の上の硬い面が路面だと考えられる層(10, 11, 12, 16, 19, 27)です。また中央部では波板状凹凸面も出ています。

続いて、特徴④尾根上の道路推定延長が約1kmに及ぶということです（図10）。杉沢遺跡の調査

杉沢遺跡道路遺構の特徴

- ①尾根に造成された平坦面をもつ
- ②地盤改良の痕跡「波板状凹凸面」が残る
- ③道路幅約9m
- ④尾根上の推定延長距離は約1kmにも及ぶ
- ⑤出土遺物等から時期を推定できる

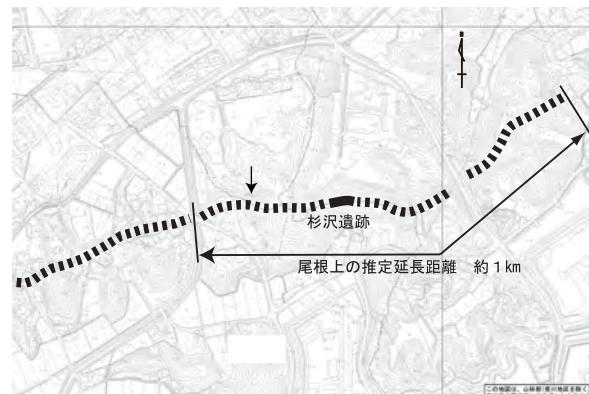


図10 古代道路の推定ルート



図11 現存する切り通し（西から）

地点の前後を改めて歩いてみると、同じように幅の広い所が部分的にあり、ほぼこのルートを通っていたのではないと思われる、幅が約10mの平

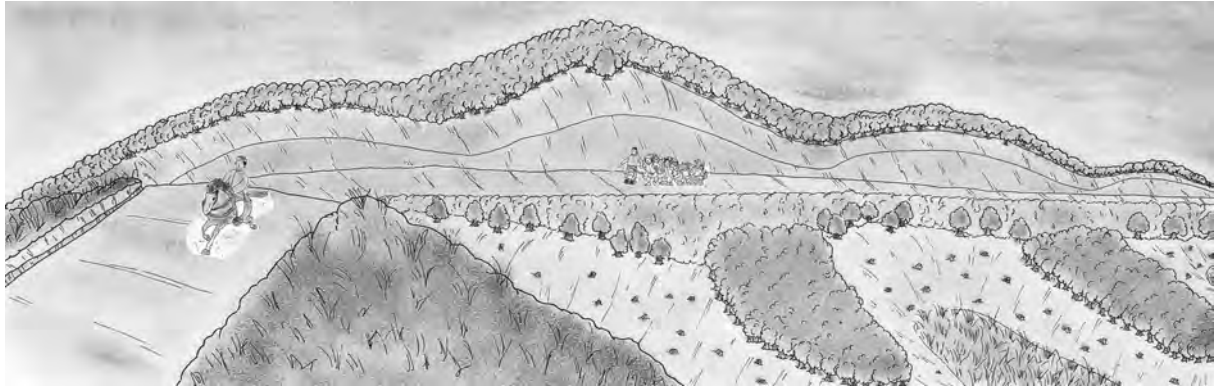


図12 杉沢遺跡イメージ

らなところや、高い山を切り崩して、平らな面を造った様子などがわかる所があります。このあたりでは標高が25m～30mの間の尾根を通っています。途中から尾根が高くなる所については、尾根を切って、ほぼ同じ高さになるような工事の痕跡が見受けられます。道路ですので、この先もつながってはいるのですが、諸説ありますし、他の遺跡との関係もありますので、これから調査等を行っていきたいと思っています。

図10の矢印の部分は、現在まだ調査は行っていないですが、図11の写真が現況です。人が立っている面が平らな面で、幅が約5～6mあります。この北側は崩れていて、当時はもう少し広がったのではないかと思います。斜面を急角度で切り崩して、平らな面を造ったのではないかと思います。この高いところから平坦面までは、高低差が約10m以上あり、切り通しと呼んでいます。大規模な工事の跡も見られます。

図12のイラストは、杉沢遺跡の当時の状況を推定して描いたものです。右側では、山の斜面を切って平らな面を造って、また左側は尾根の上をそのまま利用して通った様子です。こういった人たちが通ったかについては、また後ほど先生方からお話しがあるかと思います。

最後に特徴⑤です。遺跡が造られた時代を決めるものとして、土器があります。こちらで出土した土器は非常に少ないですが、代表的なものが2点、須恵器の壺の底部と土師器の坏があります。須恵器は、波板状凹凸面の底の地山にめり込んでいました（図13）。また、土師器は山の高い部分を切った斜面から出土しました（図14）。こちら

も細かい破片でしたので、なかなか元の形への復元が難しかったため、近くの杉沢横穴墓群から出ている同じ形態の土師器を参考に載せています。内外面ともに、赤色顔料が塗られています。これらの時代ですが、飛鳥時代から奈良時代の初めくらい、今から約1300年前の遺物です。

最後のまとめになりますが、島根県内では道路遺構を調査した例は非常に少ないです。この杉沢遺跡では県内で初めて、両側の側溝とその間に波

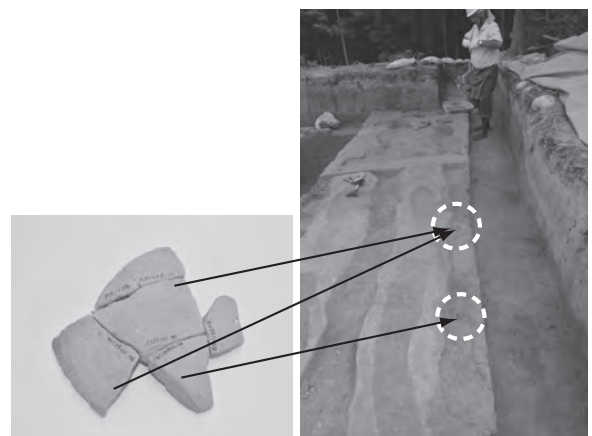


図13 出土した須恵器(左)と出土状況

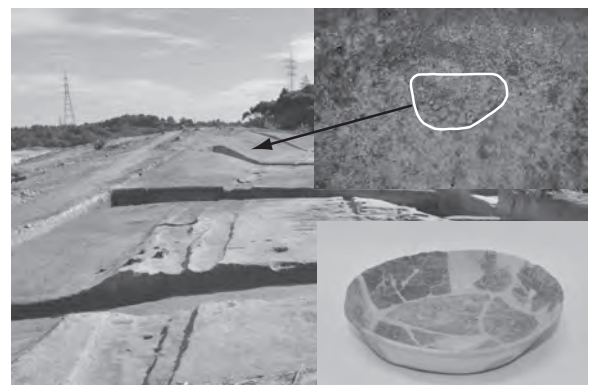


図14 土師器出土状況と杉沢横穴墓出土の土師器

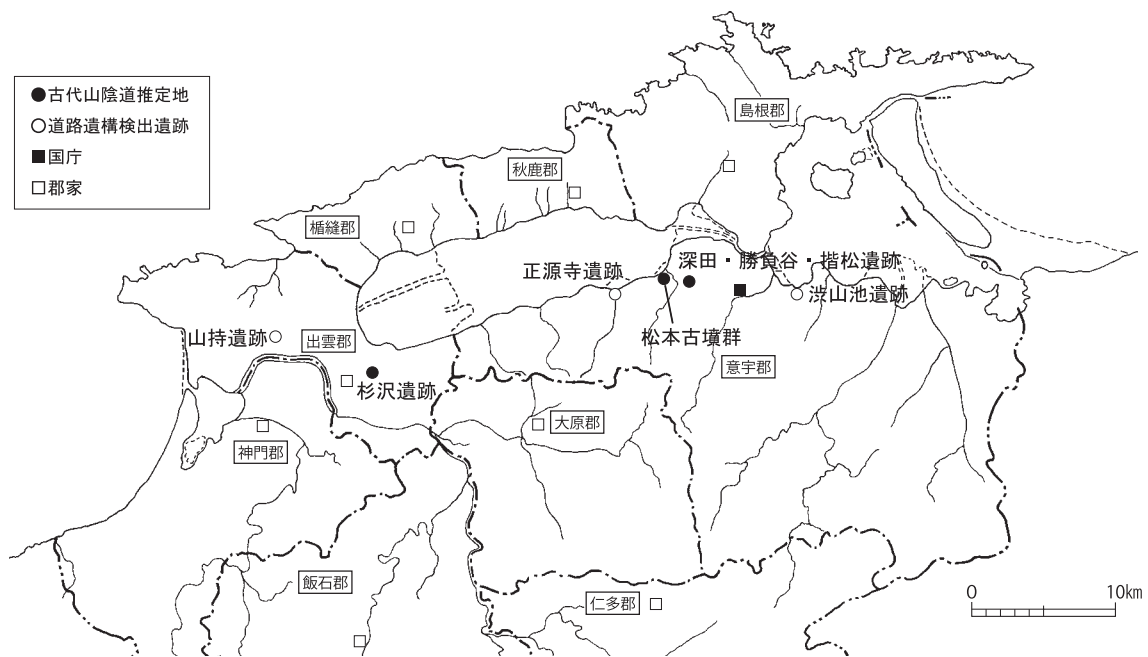


図15 島根県内で確認されている道路遺構検出遺跡

板状凹凸面を同時に検出し、道幅が幅9mということを確認できています。また、大規模な土木工事が行われたこと、そして出土した土器が飛鳥時代から奈良時代前期、約1300年前になるということから、この道路遺構は古代山陰道の一部である、という結論に至っています。長い道の一部分ですので、まだ、確定というわけにいきませんが、今のところ、『出雲国風土記』の道度条に出てくる「正西道」ではないかと考えています。

今後の調査予定ですが、先ほど副市長からありましたが、杉沢遺跡の道路遺構は、工業団地の造成範囲から外し、保存することが決定しております。保存が決定したことによって、ここが東西にどれくらい延びていくのか、どこまで同じ時代の道があるのか、また他の道がないか、それらを調査するために、今後5年をかけて詳細な測量から始め、トレンチ調査等を行う予定にしています。

最後に、県内の道路遺構についてですが、道路遺構を発掘調査した所というのは、島根県内ではあまり多くありません(図15)。古代山陰道推定地は、黒丸のところですが、松江市にある深田・勝負谷・楮松遺跡、松本古墳群において、山陰道と推定される遺構が出ています。松本古墳群では、道幅が10m近くあったと言われていますが、谷の両側を掘って幅を広げる工事がされている所

が見つかっています。ここは今の松江道路になっていますので、現在見ることはできません。また深田・勝負谷・楮松遺跡については、松江市の総合運動公園になっています。

出雲市内では、西林木町の山持遺跡で、水田の下から波板状凹凸面が見つかっています。

大変早口で、雑な説明で申し訳ありませんでしたが、以上で終わらせていただきます。

【参考文献】

- 木本雅康2001「出雲国宍道・狭結両駅間の古代駅路」『杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』斐川町教育委員会
- 島根県教育委員会1997『松本古墳群 大角山古墳群 すべりざこ古墳群』
- 島根県教育委員会1997『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』
- 島根県教育委員会2006『県道浜乃木湯町線(湯町工区)建設に伴う発掘調査報告書』
- 島根県教育委員会2010『山持遺跡6(4, 6, 7区)』
- 島根県古代文化センター編2014『解説出雲国風土記』
- 斐川町教育委員会2001『杉沢Ⅲ・堀切Ⅰ・三井Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団2006『渋ヶ谷遺跡群発掘調査報告書』